

PROJECT MEMBER

〈代表者〉 工学部 建築工学科

教授：西沢 大良

芝浦地域(港区芝浦1～4丁目、海岸3丁目、港南3丁目)は近隣地域を経済特区に指定され、大手開発業者による高層マンションと高層オフィスの開発が急速に進められている。地域における住民数は過去5年間に1.2万人増、外部からの通勤者数も3万人増であり、今後さらに激増することが予想されている。その裏面として、地域の活動は急激な開発によって新旧2派に分断され、1つの街が至る所で2つに引き裂かれつつある。西沢研究室では、2014年初頭に当地域の地元企業数社から依頼を受け、芝浦・港南エリアの地域連携についての予備調査と今後のまちづくりに対する提案を行った。これらの作業を段階的に発展させ、地元の期待に応えることを、活動目的とする。

西沢研究室では“(仮称)芝浦まちづくりセンター”を開設。この“(仮称)芝浦まちづくりセンター”では、芝浦地区のリサーチ資料やジオラマ模型(都市模型)の展示を行い、現在進行中の開発の様子も都市模型に逐一反映する。街で起きていることの『調査⇒住民や企業との意見交換⇒問題整理⇒提案』を集約することで、地域の4つの集団(地元企業／地元住民／地元新規住民／芝浦工業大学)が参加可能なまちづくりの拠点とする。

2015年度 活動の成果

教育

海外学習・国内学習(まちづくり事例)

前期においては、学部2年『海外建築研修』(選択科目、履修者70名)を対象に、イタリアとフランスへ渡航し、実際に海外のまちづくり事例を現地見学した(ローマ、フィレンツェ、ジェノバ、パリ、他)。同時に各地の都市博物館において、現地の都市模型や都市年表を用いた講義を行った。また、夏休み期間に学部生と院生を対象にした『ロシア建築実習』(選択科目、履修者9名、ロシア学生9名)を行い、現地のロシア人学生たちと共にサンクトペテルブルクの都市博物館を訪問し、第2次世界大戦時のレニグラード包囲戦を含む都市形成史を学習した。後期においては、研究室の学生6名を対象に、国内のまちづくり事例を見学し(岡山、山口・萩、小倉)、近世から今日までの都市形成について学習・調査した。

調査力・伝達力・企画力の強化

2014年度の予備作業に引き続き、理工学研究科『建築設計研究』(必修科目、履修者14名)において芝浦港南地域の調査を行った。統計データをはじめ、住民の声も取り入れたヒューマンスケールの調査を継続的に行っている。また地元企業や住民による定例会議に出席し、港南エリアの現状の問題点を把握すると共に、(仮称)芝浦まちづくりセンターの次年度からの運営に関する企画作業を続けている。また、企業や建築事務所・施工業者などと打ち合わせ、(仮称)芝浦まちづくりセンターの

施工補助作業も進めている。

研究

芝浦港南エリアのリサーチと展示物の作成

学生達の研究成果(卒業論文・卒業設計・修士論文・修士設計)とその調査資料、世界の都市事例集やデータ集、参考文献や必読書等を(仮称)芝浦まちづくりセンターの図書アーカイブとして公開し、地元企業・地域住民のためのまちづくり専用の図書室を段階的に形成していく。芝浦地域を研究する学生は、西沢研究室のメンバーのうちの約1/3程度(20名中8名)であり、学部4年生～修士2年生までを垂直統合した研究班とする。研究成果の一部は、(仮称)芝浦まちづくりセンターに展示する芝浦地域の現地調査資料やジオラマ都市模型(縮尺1/600で芝浦地域を再現)に反映し、地域に公開する。さらに、開設後の(仮称)芝浦まちづくりセンターにおいては、社会実験を兼ねた研究活動(注1)を定期的に行い、まちづくりセンターの存在が研究成果へつなげることを想定している。

(注1) 地元の子供たちを対象とした学生と子供たちとのワークショップや学習教室、アンケート調査を行う、まちづくり講演会を行う、等。次年度以降に月1回のペースで開催予定。

社会 貢献

MAKE ALTERNATIVE TOWN展

芝浦地域にある社団法人日本建築学会所有の「建築会館」1階ギャラリーにおいて、MAT展(MAKE ALTERNATIVE TOWN展)を4月に開催し、西沢研究室の学生による会場構成を行い、かつ学生の制作したジオラマ都市模型の展示を行った。この展覧会ではジオラマ都市模型を囲むようにまちづくりへの参考資料や地元企業や建築関係者たちの資料を配置し、芝浦地域の訪問者にとって関心を高める内容とすること、そして(仮称)芝浦まちづくりセンターの先行実験(展示実験)を行うこと、を目的とした。会期中の4月22日(水)には一般公開の講演会を開催し、学生を中心にリサーチを行った芝浦港南エリアの研究内容を発表することで、芝浦地域の現状を報告した。基本的に研究室や学生の活動を、キャンパス内でなく外において(芝浦地域において)行うことを重視した。

今後の活動内容

5～8月にかけて、前述の展覧会の発展形として、芝浦地域において常設展示を行うためのスペース、(仮称)芝浦まちづくりセンターの場所の選定と実測、工事費概算や交渉を行った。最終的な場所は東京都港区港南3丁目4-27「第2東運ビル」の1階隅とすることになり、9～12月にかけて設計作業を行い、1～3月にかけて施工作業と開設準備作業(都市模型や調査研究書などの展示物制作)を行っている。

対象となる「第2東運ビル」は、地元企業が所有する倉庫建築。(仮称)芝浦まちづくりセンターを開設する部屋の面積は約70m²(施設全体では延6000m²)、築50年のRC造の倉庫建築の一画にある。この部屋は、ローディングベイを介して前面道路に面しており、前面道路にバス停(コミュニティバス)もあるとはいえ、ローディングベイの存在が部屋と道路のつながりについての視覚的な障害物になっており、地域住民からは認知されにくい条件をもった部屋である。そのため設計においては、この全面道路壁の外壁を大幅に解体し、開口部を最大化することで、通りからの視認性を高めることを重視している。

さらに、開設後の(仮称)芝浦まちづくりセンターの認知度をあげるため、次年度の運営企画の立案も、開設準備作業の一部として進めている。現時点での企画として、(例1)定期的に企業関係者や建築関係者のトークイベントを行い、この場所がたんなる倉庫ではないという事を地域住民に認知してもらう、(例2)地元住民や子供たちを対象としたワークショップを行い、昼間人口の特性にあわせてまちづくりセンターへの関心を抱いてもらう(そこから他世代に広げていく)、(例3)この場所を利用した人達や地域住民を対象にSNSを利用したアンケートを行い、芝浦地域に今何が求められているのかについて、住民や企業目線の情報収集を行う(その結果は修士研究や卒業研究の素材として活用する)、等の企画を考案中である。キャンパス内でなく外に拠点をもつことで、教室では行えないような地域のまちづくり参加に直接的に関わる活動を行っていく予定である。

海外事例調査

学部2年生約70名と院生4名と一緒に『海外建築研修』の授業で、イタリアとフランスへ渡航し、都市数ヶ所においてそれぞれのまちづくり事例(市街地再開発事例)を見学し、現地講義を行った。



ジェノバでの
解説風景

ジェノバでは(図1)、にぎわいの衰退していた港湾地域を歩行圏の拡大や車道の立体化等により、都市から連続的に人の流入を可能にするような大広場や埠頭の整備がなされている。建築的にも要の施設が整備されており、船を利用した水族館や、倉庫をリノベーションした商業施設や、ジェノバの港湾の世界史的な価値を展示する海事博物館など、意欲的な計画が多くなされており、芝浦地域の参考になる現地調査・講義になった。



フィレンツェでの
都市模型見学

フィレンツェでは(図2)、過去数百年間断続的に制作し続けられてきた都市模型を前に、フィレンツェの伝統的なまちづくりについての講義を行った。現実のフィレンツェの街の変化を数百年にわたって反映し続けてきた都

市模型に触れ、その表現方法や公開方法についても研究した。

MAT展とフォーラムの開催

芝浦地域にある社団法人日本建築学会「建築会館」の1階ギャラリーにて、MAT展(MAKE ALTERNATIVE TOWN展)が開催され、展覧会の会場構成を行った。展覧会の期間は4月16日～22日の1週間、会期中にはフォーラム(講演会+公開討論会)も併催され、学生の作業成果(都市模型制作や地域調査結果)を一般公開した。



MAT展の会場
構成

会場構成においては、展覧会場の中央に、芝浦地域の都市模型を展示した。都市模型の制作は、西沢研究室を中心とした芝浦工業大学の学生30名によって行われた(西沢研究室メンバー20名+建築工学科学部2～3年生10名)。模型のサイズは約3.6m×2.7m、縮尺は1/600であり、展示を見に来る地元企業や地元住民、建築関係者にとって認知しやすい大きさとするこで、芝浦地域の街のあり方について多くの意見を交わすことができた。また、西沢研究室20名は会場の設営作業も行い、地域のまちづくり参加・第1弾の経験となった。講演会(公開討論会)においては、芝浦地域の過去の街の変化と問題点、今後の予想、それまでに考慮すべきまちづくりの方向性について、西沢研究室の行った調査研究を発表した。芝浦地域には山手線の新駅計画、リニア中央新幹線の新駅計画、アジアヘッドクォーター特区計画などが予定され

ており、さらに海側には2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催地に面しているため、この講演会には多数の開発業者や建設業者の参加申込みがあり、活発な意見交換がなされた。

ジオラマ都市模型スタディ&制作

4月に行ったMAT展で展示した芝浦地域のジオラマ都市模型(仮制作品)をベースとし、(仮称)芝浦まちづくりセンターに展示するジオラマ都市模型の本制作を行った。仮制作の時点で省略していた部分(建物約500棟、ゆりかもめとレインボーブリッジ、対岸の島、田町駅西口街区など)を全て統一的な表現で制作した。またMAT展の見学者の声を反映し、従来の建築的な模型表現でなく、一般市民にとって理解しやすい模型表現をスタディした(芝浦地域の住民が生活する上で目印にしている橋や巨大な看板広告などの、人のアイレベルに存在するモノをリアルに表現するなど)。(図4)



模型表現のスタ
ディ風景

芝浦地域の調査・研究・発表

(仮称)芝浦まちづくりセンターに図書室・資料室としての機能も持たせるため、図書アーカイブの作成とリスト化を行った。また、昨年から行っている芝浦地域の調査についても、研究室内で調査班メンバーを決め、定期的

にゼミを開催し、継続的な作業を行った。この一連の作業は研究室メンバーの修士設計・修士論文に結実している。またその研究結果については、地元企業との定例議会においても報告している(図5)。



定例議会の様子

内装リノベーションの提案

(仮称)芝浦まちづくりセンターが開設される倉庫のリノベーション設計(内装設計)を、修士1年全員を対象としたコンペ形式で行った(9月以降は修士2年生と学部4年生が卒業に向けて論文の執筆に移行するため、修士1年生8人を2人ずつの4班で構成し、各チームが別々の素材で内装案を提案する体制とした)。

この設計作業は、内装設計ではあるものの、RC造の躯体の部分解体を含むこと、構造設計事務所との打ち合わせも必要であること、事業予算や施工方法や工期などの条件に納める必要があることなどから、建築物の実施設計に準じる実務作業である。通常の大学における設計演習課題とは次元の異なるシビアな作業であり、施工や見積りや工法に関する基礎知識を学習しつつ行った。

設計メンバーは、回を重ねるごとに、より施工容易な設計案を作成するようになり、予算内で収めるための見積り作業や、構造設計事務所との協議も行うようになった。また、それらを事業主(地元企業)との打ち合わせで協議するなど、対話力においても向上した。またとない問題解決型PBLの学習機会となった。